

## 日本語における「～くも・にも」型評価副詞的表現

—「～ことに」型との比較も含めて—

常 舒 婷

## 1. はじめに

「評価副詞（成分）」とは、「文頭または主題の直後に位置して『文の叙述内容に対する話し手の評価を表わす』語句」（工藤2000：222）を指す。評価成分（副詞）は叙述内容の外部に位置し、構文上の独立性が高い。また、形式的にも多様性が見られ、一語の副詞から複合的な副詞構造に至るまで、さまざまな表現形式が観察される。例えば、

(1) あいにく雨が降っているので自転車では行かれず、バスと電車を乗り継いで行く。

(『Yahoo! ブログ』)<sup>(1)</sup>

(2) 大会では惜しくも優勝を逃しましたが、2人は「昨年に引き続き2回目の全国大会出場だったので緊張せずに試合に臨めました。(『Yahoo! 知恵袋』)

(3) こうして、不幸なことに、第二のチャンスも過ぎ去ってしまった。(『永田町の暗闘』)  
のように、「あいにく」「惜しくも」「不幸なことに」はいずれも評価副詞（成分）であり、後続する叙述内容に対する話し手の評価的な見解を表している。本稿では、これらの形式を包括して「評価副詞的表現」と呼ぶこととする。

評価副詞的表現のうち、「～くも・にも」形式と「～ことに」形式は、いずれも形容詞・形容動詞類から展開された形式であるため、相互に置き換えられる場合もたくさんある。例えば、上記の(2)(3)は以下のように置き換えることができる。

(2') 惜しいことに、大会では優勝を逃しましたが、2人は「昨年に引き続き2回目の全国大会出場だったので緊張せずに試合に臨めました。(作例)

(3') こうして、不幸にも、第二のチャンスも過ぎ去ってしまった。(作例)

一方で、置き換えが成立しない用例も当然挙げられる。

(4) すでに全身をくまなく刺され、特に顔面は無惨にも腫れまくっています。

(『このダジャレで生きのびろ!』)

(4') ??すでに全身をくまなく刺され、特に顔面は無惨なことに腫れまくっています。(作例)

(5) 妙なことに、目が落ちくぼんで頬骨がつきだすにつれて、みな同じような顔になってきた。(『復讐する海』)

- (5) \*妙にも、目が落ちくぼんで頬骨がつきだすにつれて、みな同じような顔になってきた。  
(作例)

従来の先行研究では、「～も」形式から「～ことに」形式への移行現象が指摘されており(西川1997)、現代においては「～ことに」形式が最も生産的であることが示されている(工藤1997)。しかしながら、現代日本語においても「～くも・にも」形式は頻繁に使用されており、「～ことに」に置き換えられない用例もしばしば見られる。

このことから、「～くも・にも」形式と「～ことに」形式が形容詞・形容動詞を前接する際、置き換え可能な語彙と不可能な語彙の境界線はどこにあるのかという問題点が浮かび上がる。また、例(4)における「無惨にも」のように、文全体ではなく特定の主体の行為や性格に対する評価を表す「～くも・にも」形式はどのような意味的特徴を持つのかといった点も、十分に解明されていない。

そこで本稿では、評価副詞的表現の展開パターンとして機能する「～くも・にも」形式に着目し、それに前接する形容詞・形容動詞の使用実態を明らかにした上で、生産性が高いとされる「～ことに」形式との比較を行う。そのうえで、「～くも・にも」形式から「～ことに」形式への移行可能性および使用制限の有無を検討し、形容詞・形容動詞類に関わる評価副詞的表現を包括的に把握してみる。

## 2. 先行研究

評価副詞的表現「～くも・にも」に関する主な先行研究として、工藤(1997)、西川(1996, 1999a, 1999b, 2004)、田中(2003)などが挙げられる。

まず、工藤(1997)は評価成分を「文の叙述内容に対する話し手の評価を表わす、先行する独立的成分」(p.62)と定義し、その〈代表的な型〉と〈代表的な語例〉を分類・提示している。その中で、b)「～も」形式については以下のように細分されている。

### b1) 形態が固定的なもの

奇しくも いみじくも はしなくも ゆくりなくも はからずも

[早くも(時～)／辛くも 脆くも 心ならずも(動作修飾へ)]

[よくも 曲がりなりにも／いやしくも 仮にも(叙法副詞～)]

### b2) 修飾用法が稀で、ほぼ評価用法専用(「内容」の連用用法はある)

コト：残念にも 惜しくも 不本意にも 無念にも 心外にも

ヒト：奇特にも 卑怯にも 非常識にも 不覚にも 無能にも

### b3) 評価用法「～も」↔修飾用法「～φ」両用型<sup>(2)</sup>

コト：うれしくも 悲しくも なつかしくも 情けなくも 愉快にも 不愉快にも

不当にも 空しくも 皮肉にも 意外にも [案外(に)(程度・叙法～)]

ヒト：大胆にも 不用意にも うかつにも 親切にも けなげにも 頑固にも

これらの分類に対して、工藤（1997）は品詞論的な観点から次のように位置づけている。「形態的に固定している b1) (中略) は、品詞としても『評価副詞』としてよいだろう。b2) は『～に思う』のような内容の連用用法を別扱いしてよければ、評価副詞に含ませうる。b3) は、形容詞と扱うべきだろう」(p.67)。ただし、形容詞・形容動詞類に関わる他の評価副詞的表現、すなわち「～ことに」形式との置き換え関係に関しては詳しく言及されていない。

次に、西川（1996, 1999a, 1999b, 2004）による一連の研究は「評価的文副詞」に注目し、通時的变化を明らかにしている。特に、近世以降「ことに」型が出現し、近代には「珍しくも」「意外にも」などの「も」型副詞句から「ことに」型へと移行する傾向が見られると指摘されている。また、西川（1996）は、「も」型と「ことに」型の相違点として以下の二点を挙げている。1. 「複文において、評価的文副詞が従属節に現われる場合、『も』型の評価的文副詞の場合には、その修飾範囲が従属節内に限られるのに対して、『ことに』型の場合には、従属節内に限らず、主節まで及ぶことも可能である。」(p.126)、2. 「『ことに』型が、『驚いた』『困った』『呆れた』などの一部の感情動詞を副詞化できるのに対して、『も』型はできない。」(p.127) とされている。しかしながら、これらの知見は通時的な変遷に主眼が置かれ、現代日本語における「～くも・にも」および「～ことに」形式の使用実態に関する記述は十分とはいえない。

さらに、田中（2003）は「～くも・にも」の意味機能を分析し、「も」における情意性の表し方を論じている。あわせて、「～だが」「～ことに」「Nのあまり」「あまりのN」などの形式との関連付けにも言及し、「～くも・にも」に関する語彙資料をも提示している。その中、「～くも・にも」の前接語に関しては、『情意』とも関係して、感情をあらわす形容詞、形容動詞「発生事態に対してプラス・マイナスの評価をくだす形容詞、形容動詞」(p.9) であると述べているが、「～ことに」との置き換え関係については、「この区分の原則、規則の特定化は現時点では困難である」(p.14) としており、体系的な整理には至っていない。

このように、「～くも・にも」形式に関する先行研究はいくつかなされてきたものの、それぞれの研究は焦点が異なり、特に「～くも・にも」形式に前接する形容詞・形容動詞の語彙的制約に関しては、研究者の内省的判断に依拠している部分が多く、広汎な用例データに基づく検討は未だ不十分である。また、隣接する評価副詞的表現である「～ことに」形式との比較においても、置き換えられる場合と置き換えられない場合の境界線はいまだ明確にされていない。

### 3. 「～くも・にも」型における形容詞・形容動詞の語彙的特徴

本節では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）を用い、「検索キー」の「品詞」を「形容詞」「形状詞」にそれぞれ設定し、「後方共起条件」として「も」（「に」「も」）を追加して用例を収集した。その後、目視による確認を行い、評価成分に該当する語彙素を抽出し、

以下の表1に示す。<sup>(3)</sup>

表1 BCCWJにおける「～くも・にも」の前接形容詞・形容動詞（括弧内は用例数）

	前接成分
～くも	早い (988)、よい (284)、惜しい (106)、卑しい (102)、いみじい (92)、辛い (57)、脆い (42)、恐れ多い (29)、図々しい (20)、珍しい (20)、厚かましい (13)、賢い (9)、有り難い (5)、儂い (5)、情けない (4)、悲しい (4)、めでたい (4)、嬉しい (3)、痛ましい (3)、忝い (3)、いじらしい (2)、可笑しい (2)、怪しい (2)、悔しい (2)、恐ろしい (2)、空しい (2)、寂しい (2)、小賢い (2)、心弱い (2)、浅ましい (2)、尊い (2)、恥ずかしい (2)
～にも	意外 (313)、幸い (166)、皮肉 (119)、幸運 (113)、不幸 (88)、無残 (47)、大胆 (46)、不運 (34)、不思議 (32)、愚か (30)、健気 (22)、丁寧 (21)、勇敢 (16)、当然 (13)、気の毒 (11)、果敢 (11)、気丈 (10)、奇妙 (9)、大胆不敵 (9)、不当 (9)、寛大 (6)、惨め (4)、残念 (4)、陰険 (3)、可哀想 (2)、浅はか (2)、単純 (2)、不可解 (2)

表1から分かるように、「～くも・にも」型に前接する形容詞・形容動詞には、感情を表すものはもちろん、人や物事の属性を表すものも含まれる。例えば、

(6) 意外にも外交員は、顔色一つ変えずに答えた。(『真夜中の太陽』)

(7) 私達の中隊は、惜しくもわずかの差で準優勝となった。(『防衛庁』)

(8) 密輸は、出島は残念にも聞こえが高いのだが、何人かの人々の貪欲のなせる仕業である。  
(『新・シーボルト研究』)

のように、「意外」「惜しい」「残念」はいずれも話し手の感情的評価を表すものである。しかしながら、「～くも・にも」型に前接する形容詞・形容動詞にはすべての感情形容詞が自然に使えるわけではない。その典型例としては、「嬉しくも」と「楽しくも」の用例が挙げられる。

(9) 嬉しくもプレゼントをいただきました。(作例)

(10) \*楽しくもプレゼントをいただきました。(作例)

のように、「嬉しくも」は使えるが、「楽しくも」はほぼ使えない。これは、「嬉しい」と「楽しい」の語彙的特徴に還元できると考えられる。菊地(2000)では、「嬉しい」は「<いいこと=自分(当該の人物)を直接に益することで、それほどは実現しやすくなく、自分ではその実現を(完全には)コントロールできないこと>」が起こり、あるいはその実現が間近に迫り、それに触発されて起こる、「<快/喜び>の感情」(p.153)を表すのに対し、「楽しい」は「時間の過ごし方について、心で快と受け止める感覚」(p.147)を表すと述べ、即ち「嬉しい」は個人を対象とした感情であるのに対し、「楽しい」は周囲に共有可能な感情であるため、「嬉しくも」「嬉しいことに」は評価副詞的表現として機能できる一方、「楽しくも」「楽しいことに」は使用できないわけである。なお、感情形容詞を前接する「～くも・にも」型と「～ことに」型の比較について、次節で詳述する。

(11) 嬉しいことに、今度5月上海で中国のファンのためにファンミーティングを開くことになりました。(『Yahoo! ブログ』)

(12) \*楽しいことに、今度5月上海で中国のファンのためにファンミーティングを開くことになりました。(作例)

感情を表す形容詞・形容動詞が「～くも・にも」形式と共起しやすいほか、感情を表さない形容詞・形容動詞の例も多く見られる。

(13) 大胆にも女装して強盗を働き、戻ってきて休んでいるところを踏み込まれたのだ。

(『偽偽満州』)

(14) オートバイレースで骨折しギプスをはめていたが彼は健気にもその姿で船に乗り込んできた。(『モリさんの釣果でごちそう』)

のように、「大胆にも」「健気にも」は感情ではなく、人の行為や属性を表す形容動詞である。

また、「～くも・にも」型に関わる用例の中で、「早くも」の出現頻度が際立って高いことが注目される。

(15) その虱も何十匹となく取換えられて行く中に、早くも三年の月日が流れた。

(『山月記・李陵』)

(16) 普段は強気なアキラが早くも涙目になっていた。(『別冊文藝春秋』)

のように、(15)における「早くも」は時間的属性を表しつつも、「予想よりも早い」という話し手の感覚または経験による判断が含まれており、主観的な感覚評価を帯びている。時間関係だけでなく、(16)のように、普段は強気な人物が涙目になるという出来事が予想外の早さで起こったという「意外性」も同時に表現されている。

このように、「早くも」はただ時間を表す表現だけでなく、評価副詞的表現としても機能する。その一方、「遅くも」は評価用法として使われない。

(17) いつもなら遅くも七時までには訪れるのが習いになっていた。

(『二階建〈ひかり〉号の殺人』)

(16') ??普段は感性的なアキラが遅くも涙目になっていた。(作例)

即ち、(17)における「遅くも」は「遅くとも」の意味であり、(16')のような評価用法も成立しがたい。なお、なぜ「早い」が「～くも・にも」をつけると評価副詞的表現となるのかについて、今後の課題にしたい。

さらに特筆すべき用法として、「よくも」という評価用法には、形容詞「よい」の意味とも異なり、副詞「よく」の意味特徴ともズレる場合がある。

(18) いかにおれたちが聞いていないとは言いながら、よくもそうまで平気で嘘がつけたものだ。(『日本ジュニア文学名作全集』)

(18)における「よくも」は、「そうまで平気で嘘がつけた」という非難や反語の意味を帯び、「な

かなかできないことが起こった」ことへの強調が「皮肉」へと転じ得る評価副詞の表現である。これに対して、対義語の「悪くも」は評価副詞の表現としては用いられず、「良くも悪くも」という慣用表現として使われる用例しか観察されない(19)。

(19) アメリカ映画では、私たちはよくも悪くも強烈なデ・ニー口節を楽しむのである。

(『朝までビデオ』)

そのほか、西川(1996)が指摘したように、通時的には「～くも・にも」型から「～ことに」型への移行が見られるため、BCCWJにおいても、「～くも・にも」形式はやや古風で書き言葉的な表現として現れる例が確認できる。<sup>(4)</sup>

(20) これは今いみじくも言われました産構審の答申ではこういうふうになっていますね。

(『国会会議録』)

(21) 土地の郷司の土師直中知に相談したところ、これは尊くも聖観音像だということで、三人は小さな御堂を建てて聖観音像をお祀りした。(『東京都電幕情』)

(22) 例外的に身分の軽い侍や、大罪を犯したものに死罪(正式には斬罪という)が適用されるが、いやしくも源十郎は直参の幕臣である。(『冥府の刺客』)

このように、「～くも・にも」に前接する形容詞・形容動詞には、「意外」「惜しい」のような感情を表すものが多いが、「大胆」「健気」といった人の行為や性格を表す属性形容詞、さらに「早くも」「よくも」「いみじくも」のような語彙的表現も観察される。従って、評価副詞的表現としての「～くも・にも」形式は、文法的側面よりも語彙的特徴が顕著であることが分かる。

#### 4. 関連形式「～ことに」型との比較

前節では、「～くも・にも」構文における前接形容詞・形容動詞の語彙的特徴について考察した。本節では、同様に形容詞・形容動詞(およびその連用形)と共起して評価副詞的表現を形成する「～ことに」型とはどのような共通点および相違点を有するのかについて検討する。

##### 4.1 前接する形容詞・形容動詞の特徴

まず、「～くも・にも」と同様の手法で、BCCWJから「～ことに」が評価副詞的表現として用いられる用例を収集し、前接する形容詞・形容動詞の上位20例を抽出し、その結果を表2の(1)(2)に示す。また、二つの形式の置き換え関係については、BCCWJにおいて両形式がともに出現する語彙素の場合、その用例数を表2に示す。一方、BCCWJに用例が見られない場合には、日本語母語話者インフォーマントの判断に基づき、「自然である」ものを「○」、「意見が分かれる」ものを「△」、「不自然である」ものを「―」で示す。

表2からわかるように、「～くも・にも」及び「～ことに」形式には共通して現れる語彙が多い一方で、それぞれに特有の前接語彙も見られる。本稿における形容詞分類は、西尾(1972)を

日本語における「～くも・にも」型評価副詞的表現

表2 「～くも・にも」「～ことに」形式の比較（括弧内は用例数）<sup>(5)</sup>

(1) BCCWJにおける「～くも・にも」の上位20例と「～ことに」との置き換え関係

～くも・にも	～ことに
意外 (313)	(97)
幸い (166)	(166)
皮肉 (119)	(163)
幸運 (113)	(27)
惜しい (106)	(16)
不幸 (88)	(37)
辛い (57)	△
無残 (47)	△
大胆 (46)	○
不運 (34)	(20)
不思議 (32)	(262)
愚か (30)	(2)
恐れ多い (29)	○
健気 (22)	○
丁寧 (21)	(3)
図々しい (20)	○
珍しい (20)	(13)
勇敢 (16)	○
厚かましい (13)	○
当然 (13)	(3)

(2) BCCWJにおける「～ことに」の上位20例と「～くも・にも」との置き換え関係

～ことに	～くも・にも
不思議 (262)	(32)
残念 (252)	(4)
幸い (166)	(166)
皮肉 (163)	(119)
ありがたい (114)	(5)
悪い (101)	—
意外 (97)	(313)
面白い (83)	△
奇妙 (82)	(9)
興味深い (68)	△
悲しい (54)	(4)
嬉しい (37)	(3)
不幸 (37)	(88)
幸運 (27)	(113)
恐ろしい (25)	(2)
不運 (20)	(34)
情けない (16)	(4)
惜しい (16)	(106)
まずい (15)	—
妙 (15)	—

参考し、形容詞を大きく「客観的な性質・状態をなすもの」(属性形容詞)と、「主観的な感覚・感情の表現をなすもの」(感情形容詞)と区別する。(p.21)

感情を表す形容詞・形容動詞のうち、「嬉しい」「残念」「気の毒」などはいずれの形式にも出現し、相互に置き換えることができる。なお、両形式におけるニュアンスの違いについては、4.2で詳述する。

- (23) 性根の悪い一頭のラバがカヘレの鼻面を理由もなく蹴り付けたので、気の毒にもカヘレは鼻血を出してしまった。(『イザベラ・バードのハワイ紀行』)
- (23') 性根の悪い一頭のラバがカヘレの鼻面を理由もなく蹴り付けたので、気の毒なことに、カヘレは鼻血を出してしまった。(作例)
- (24) 残念なことに、美由紀にとってはひとつとして楽しめるものはなかった。

(『千里眼マジシャンの少女』)

(24) 残念にも美由紀にとってはひとつとして楽しめるものはなかった。(作例)

一方、「面白い」「興味深い」「辛い」のような感情的な評価を表す形容詞・形容動詞類は「～ことに」形式を後接できるが、「～くも・にも」形式とはやや共起しにくい。

(25) 面白いことに、その全てにわたって具体的な活動のプログラムが組まれるようになってきたことです。(『実践ボランティア講座』)

(25') \*面白くも、その全てにわたって具体的な活動のプログラムが組まれるようになってきたことです。(作例)

(26) 興味深いことに、この頃までの料理人は、いずれも中国人が多かった。

(『ラーメンの誕生』)

(26') \*興味深くも、この頃までの料理人は、いずれも中国人が多かった。(作例)

さらに、前節でも述べたように、「楽しい」は「～くも・にも」「～ことに」両方とも共起できないものである。

(27) \*楽しくも彼女がケーキを作ってくれた。(作例)

(27') \*楽しいことに、彼女がケーキを作ってくれた。(作例)

また、感情形容詞だけでなく、両形式は「情意性」<sup>(6)</sup>を表す属性形容詞とも共起できるが、純粹な属性を表す形容詞類とは共起しにくい。例えば、「奇妙にも・奇妙なことに」は使用できるのに対して、「丸くも・丸いことに」は言えない表現である。

(28) {奇妙にも・奇妙なことに}、上記のことは意外に知られていない。(作例)

(29) \*{丸くも・丸いことに}、地球の形を知っている。(作例)

しかしながら、工藤(1997)によれば、「～ことに」形式は「形容詞のみならず評価・感情的な動詞から作られ、(中略)現在ももっとも生産的と言ってよい型である」(p.63)とされているが、実は「～くも・にも」と置き換えられない用例も挙げられる。前節で述べたように、「～くも・にも」形式は「健気」「果敢」など、人の行為や性格を表す属性形容詞とも共起する。このように、文全体ではなく特定の動作や行動に限定して評価を表す場合、「～ことに」形式に置き換えるとやや不自然となる。例えば、

(30) 脇から、老人が果敢にも地元ワインをアゴスティネットに勧めた。

(『海をゆくイタリア』)

(30') ??果敢なことに脇から老人が地元ワインをアゴスティネットに勧めた。(作例)

のように、(30)では、「果敢にも」は文全体よりも「地元ワインを勧めた」という「老人」の動作に対する評価であるため、文全体に対する評価に限定する「～ことに」が使用しにくい。

#### 4.2 後接する述語（文）の傾向性

評価副詞的表現として機能する「～くも・にも」及び「～ことに」形式は、形容詞・形容動詞の意味特徴に深く関連しており、後続する述語（文）にも連動している。

後続述語（文）の性質から見ると、実は「～くも・にも」形式は意味的に限定された述語と共起しやすく、述語（文）における「語彙的固定性」が強い。「惜しくも」を例とすると、「目的達成に至らなかった結果」に関連する述語（文）と結びつきやすい。

(31) 男子のキックベースボールは、惜しくも予選で敗退しましたが、女子は予選を突破し決勝トーナメントに進出。（『広報有田』）

(32) 9月二十八日の対サントリーフーズ戦は惜しくも逆転負け。（『広報あきた』）

のように、述語（文）の品詞を問わず、「惜しくも」の後に来るのはいずれも事柄の未達や失敗などに関わる内容である。

しかし、「惜しいことに」という形式は上記のような使用制限を持たず、より一般的な内容を後続させることができる。この場合、「惜しくも」に置き換えると、かえって不自然な文になってしまう。

(33) 惜しいことに、集まった旧友五、六人の名がわからない。（『宮崎兄弟伝』）

(33') ??惜しくも集まった旧友五、六人の名がわからない。（作例）

さらに、もう一つの典型例として、「脆くも」が挙げられる。「脆くも」は「崩れる」「崩れ去る」など、「物事の崩壊や消失」を表す動詞と共起しやすい。

(34) あの旅の楽しさーもしいま、彼と会ってしまったら、自分の決意は脆くも崩れ去るかもしれない。（『トリニティ・ブラッド』）

(35) コーネリア姫と再会すると思っていたのですが、期待は脆くも打ち砕かれました。

（『Yahoo! ブログ』）

このように、「脆くも」に関連する11例のうち、8例が「崩れる・崩れ去る」と共起し、その他にも「打ち砕かれる」「弾ける」など、同一の意味領域に属する動詞と共起する。このように、「～くも・にも」形式は後続する述語（文）の意味と密接に関連し、語彙的固定性が強いことが分かる。

一方、「～ことに」形式は、後続する文全体に対して評価をくだすという特徴を持ち、述語文における語彙的固定性がそれほど強くない。

(36) ありがたいことに、民宿のご主人が登山口まで車で送ってくれたので、時間にだいぶ余裕が出来た。（『夫唱婦随・婦唱夫隨の山登り』）

(37) 意外なことに、義文は信子に背中を向けたまま、石田直澄に訊いた。（『理由』）

のように、「～ことに」形式の作用域は文全体に及び、述語（文）の品詞や語彙的意味への指定性が顕著ではない。

また、「～ことに」形式は後続文との間に意味的なイコール関係が成立することが多く、次のような変換が可能である。

(36) 民宿のご主人が登山口まで車で送ってくれたので、時間にだいぶ余裕が出来たのは、ありがたいことである。(作例)

(37) 義文は信子に背中を向けたまま、石田直澄に訊いたのは、意外なことである。(作例)  
したがって、「～ことに」形式は文全体に関わる評価を示す表現であることが確認できる。これに対して、「AはBだ」と言える場合には「BはAだ」とも言えるように、

(38) 私は {単純にも・?単純なことに} 考えてしまった。(作例)  
において「単純なことに」が不自然であることから、「～ことに」形式は文修飾として「～くも・にも」形式よりも文の外側に位置すると考えられる。

従って、後続述語(文)の性質に着目すると、「～くも・にも」形式は後続する述語(文)と直接関わり、述語における語彙的固定性が高い。一方で、「～ことに」形式は文全体に対する評価を表し、後続述語文において意味的な一般性を示すため、語彙的固定性は強くない。

#### 4.3 程度副詞による修飾

「～くも・にも」及び「～ことに」形式はいずれも形容詞・形容動詞類と深く関わるため、程度副詞との関連性が注目される。

「～くも・にも」に前接する形容詞・形容動詞には多様なバリエーションが観察されるものの、程度副詞と共起する用例は確認されない。以下の例のように、「極めて」「とても」「ちょっと」などの程度副詞を加えると、文全体がやや不自然となる傾向がある。

(39) ??ところが、極めて残念にも、私はそれを手もなく捲き上げられてしまったのです。

(40) ??とても奇妙にも、ラグランジュの経歴はニュートンのそれと似かよっている。

(41) ??日本人なら誰でも下駄で歩けるはずなのだけれど、ちょっと意外にもうまく歩けないし、やたら足の筋肉が疲れてしまう。

(作例)

この不自然さは、「～くも・にも」形式における語彙的固定性に起因すると考えられる。すなわち、「～くも・にも」の評価性は、特定の意味の特徴を有する述語との共起によって成立するため、語彙的な側面が強く示されている。このように語彙の意味が決まっている上でさらに程度修飾を加えると、かえって不自然となってしまう。

これに対して、「～ことに」形式は程度副詞との共起においても高い生産性を示しており、程度副詞と幅広く共起できる。

(42) といえば、極めて残念なことに、これがあまり質の高いものとはいえない。

(『XaCAR (ザッカー)』)

(43) とても奇妙なことに質問事項はもっぱら診断手順（中略）に片寄っており、治療的なことはほとんど問われていなかった。（『操られる生と死』）

(44) ちょっと意外なことには、これらに次いでよく使われる“トマト”の歴史は浅く、十六世紀になって初めて南米より伝来するが、（後略）

（『南仏プロヴァンスとコート・ダジュール & モナコ』）

このように、「～ことに」構文は後続内容を「コト」として捉え、評価内容全体を名詞化することで評価の対象を明確化し、その上で程度性を自由に調整できる柔軟性をもつ構文である。そのため、程度副詞による評価性の累加や調整が可能となっている。

以上考察してきた「～くも・にも」および「～ことに」形式の比較を以下の表3にまとめる。

表3 「～くも・にも」および「～ことに」形式の特徴<sup>(7)</sup>

		「～くも・にも」形式	「～ことに」形式
前接形容詞・ 形容動詞	感情形容詞類	「嬉しい」型	○
		「面白い」型	×
		「楽しい」型	×
	情意的属性形容詞類	「奇妙」型	△
		「果敢」型	○
	純粹属性形容詞類	「丸い」型	×
後続述語（文）		語彙的固定性が強い	語彙的固定性が強くない
程度副詞による修飾		×	○

## 5. まとめ

本稿では、評価副詞的表現の一つである「～くも・にも」形式を対象とし、前接する形容詞・形容動詞類の語彙的特徴や後続述語（文）の傾向性、さらに関連形式である「～ことに」との比較を通して、その機能と性質について分析を行った。考察の結果は以下の通りである。

「～くも・にも」に前接する形容詞・形容動詞には、感情形容詞のほかに、情意性をもつ属性形容詞も観察され、文法的側面よりも語彙的特徴が顕著である。後続述語（文）の性質から見ると、「～くも・にも」形式は後続する述語（文）と直接関わり、しかも述語における語彙的固定性が強いいため、程度副詞と共に起しにくい。さらに、「～ことに」形式と比較して見れば、両形式は共通するところが多いが、前接する形容詞類の特徴や後続述語（文）の品詞及び傾向性といった点において相違を見せている。

最後に、今後の課題として以下の3点を挙げておきたい。第一に、本稿では「～くも・にも」形式と「～ことに」形式に前接する形容詞・形容動詞の置き換え可能性を検討し、特に感情形容詞類を「嬉しい型」「面白い型」「楽しい型」に分類したが、この分類方法の妥当性やそれぞれのグループに含まれる形容詞の範囲については、今後さらなる検討が必要である。第二に、「～くも・にも」形式に後接する述語（文）の「語彙的固定性」について分析を行ったが、その点についても今後より詳細な考察を行う必要がある。第三に、「～くも・にも」及び「～ことに」形式のほか、「～もので」「～ながら」形式も形容詞類に関わる評価副詞的表現として挙げられる。しかし、各形式の前接成分との共起関係や構文の特徴が大きく異なるため、それらの表現形式に関する考察は別稿に譲りたい。

#### 注

- (1) 本稿における事例は、特に断りのない限り、BCCWJによるものである。出典が明記されていない作例の自然さに関する判断基準は以下の通りとする。やや不自然な例文には「??」を、不自然と判断される例文には「\*」を付けた。
- (2) b2) b3) における「修飾用法」「評価用法」に関して、工藤(1997)は、「太郎は上手に歌を歌った。」「ご飯がおいしく炊けた。」及び「さいわい朝のうちに雨はあがった。」「珍しく、田中さんが出席した。」などの用例を挙げ、「こうした『さいわい』や『珍しく』が裏面や含みとしても叙述内容の〈装飾〉性は、『上手に』や『おいしく』が正面から文字通りの意味として叙述内容を限定する〈修飾〉性とは、基本的には区別できる。」(pp.65-66)と述べており、ここでの「装飾性」「修飾性」はそれぞれ「評価用法」と「修飾用法」に対応している。
- (3) 評価用法を判断する基準としては、評価成分の直後に述語（文）が来る用例を対象とし、形容詞による修飾用法、慣用的な言い回し及び「大きくも小さくもない」「楽しくもあり」のような用法は研究対象から除外する。なお、個人的な使用習慣の影響を考慮し、出現回数が1例のみの語彙素は除外した。
- (4) 「いみじくも」「尊くも」などの表現は古語的用法の残存であり、「いやしくも」は「仮に」の意味を表す表現であるため、研究対象から除外する。
- (5) 「～くも・にも」形式と「～ことに」形式との比較を行う際には、3節で述べた語彙的表現（「早くも」「よくも」「いみじくも」など）を比較の対象から除外する。
- (6) 「情意性」の有無を判断する基準として、本研究では以下のようなテストフレームを用いる。

属性の判断主体(が) + {形容詞の連用形・終止形と} + 感じる

すなわち、属性の判断主体が析出できるものは、単なる属性形容詞ではないと考える。例えば、「早い」「果敢」は情意性を持つ属性形容詞として「～くも・にも」を後接し評価構造となれる一方、「正しい」「赤い」のような純粋に属性や性質を表す形容詞は評価副詞構造には用いられない。
- (7) 表3における「△」は、特定の条件下で使用が認められることを示すものであり、「○」の条件付き使用を意味する。

#### 参考文献

- 菊地康人(2000)「タノシイとウレシイ」『日本語：意味と文法の風景』(国広哲弥教授古稀記念論文集), pp.143-159, ひつじ書房。
- 工藤浩(1997)「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』[再録: 工藤浩(2016)『副詞と文』, pp.59-80, ひつじ書房]。

## 日本語における「～くも・にも」型評価副詞的表現

- 工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的タイプ」仁田義雄・森山卓郎・工藤浩著『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店。
- 田中寛（2003）「評価性副詞成分の生成をめぐって—『～くも』・『～にも』とその周辺—」『別科日本語教育』5, pp.1-22.
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版。
- 西川真理子（1996）「日本語の評価的文副詞についての一考察——『も』型から『ことに』型へ——」『甲子園大学紀要 栄養学部編』24（A）, pp.123-131.
- 西川真理子（1999a）「『も型』評価的文副詞の出現と発展」『甲子園大学紀要 栄養学部編』26（A）, pp.115-119.
- 西川真理子（1999b）「日本語の評価的文副詞—『も型』と『ことに型』—」『甲子園大学紀要 栄養学部編』27, pp.41-53.
- 西川真理子（2004）「日本語の評価文副詞になり得る形容詞」『甲子園大学紀要 栄養学部編』32, pp.43-61.

### 用例出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ 中納言2.7.2 データバージョン 2021.03